

Gershom Scholem :
Walter Benjamin
die Geschichte
einer Freundschaft

壺 岐 七 濤

ヴァルター・ベンヤミンは1892年6月15日ベルリンの銀行家の息子として生まれ、様々な新聞や雑誌において、既成のジャンルにはまらない自由な文筆活動を続けたユダヤ系の哲学者であり、文学批評家である。1933年ナチ政権成立以来パリに亡命して、当時ユダヤ系左翼の牙城として危険視され、同じくパリに本拠を移していたフランクフルト社会学研究所のメンバーとなる。その後はここで、様々のモチーフをさらに展開し、後期ベンヤミンを代表する多くのエッセイを書いた。その間、研究所自身と所長ホルクハイマーが、そしてその後もアドルノーを始めとして多くの所員がアメリカ等に亡命したが、彼は「守るべきものはヨーロッパにある」とパリにとどまった。1940年パリがナチに占領されると、アメリカに逃れるため、ピレネーを越えてスペインを目指す。しかしピレネー国境で足止めされ、ゲシュタポに引き渡されることを恐れて、同年11月26日夜スペインのホテルで服毒自殺をし、悲惨な最期をとげた。

さて、ベンヤミンの仕事の多くは断片的なアフォリズムの形で書かれ、多岐にわたり独自のものであり、その全容を簡潔に捉えることはむずかしい。例えば彼は「破壊的性格」の中で、「べちゃくちゅうわさばなしをする習慣、このもっとも小市民的な習慣は、ひとびとが誤解されたがらぬところから生じたも

のである」と述べているが、彼の文章は「理解されるといふことに興味をもたない」ところから、極めて難解なものである。またその思索も、ひとつの立場を固定し、その上に自己の壮大な建物を築き上げてゆくことをこの「ひとびとが〈文化〉も〈人間〉も、一切合財《むさぼるように呑みこんで》もううんざりしている」時代においては、はっきりと拒否する。むしろそれは「既成のものを瓦礫にかえてしまう」ことを目指し、「しかしそれは瓦礫そのもののためではなく、その瓦礫をぬう道のため」である。従って彼の足跡を辿ることは、「伝統的理論」に頼る限り、極めて困難である。否、所詮不可能なことであるのかもしれない。

いずれにせよ、ベンヤミンの思考の全貌は私にとっていまだ朦朧としている。しかしその判然とせぬ中にも、社会哲学的方向では、破壊的要素を弁証法のもつ推進力と捉え、それにより「歴史の連続を打破する意識」を研ぎすまし、「人類の背中に堆積する重荷である文化史」をふり落す力を養い、「根源をこそ目標である」と定めて「いまを孕んだ過去」へと跳躍しようとしたこと、つまり革命への跳躍を試みようとしたことは感じられる。文学批評の方向では、F. シュレーゲルのローマン派の文学批評に積極的意義を認めた。つまり反省というメディウムにより思考をすべてのつながりを越えたところに導き、もろもろのつながりのもつ虚偽を明らかにすることによって、真の認識へと飛翔しようとした。例えば「ゲーテ・親和力論」では、作品の事実内容を綿密に考察しながら、その事実内容と密接不可分の形で結びついている作品の真理内容と批判的・反省的に対決していくことにより、真の認識へと無限に高まっていくことを試みていると思われる。これらの試みの内容を細かく探ることは、私の力に余る所だが、しかしそこにある、精神の非凡な鋭さだ

けは明らかに感じられる。それは否定し得るすべてを否定し、真実に迫りゆこうとする精神のエネルギーであり、ともすれば惰性に身を委ね自己の視野を狭く限定しがちな意識にとり、手ひどい衝撃を与えるものであり、同時に大きい魅力をも持つものでもある。

ここにあげた本は、このベンヤミンにユダヤ思想への興味を開かせ、かつもっとも親しい友でもあったゲルショム・ショーレムによる、彼との精神的な、また生活面での交友関係に基づいて書かれた、付録の手紙も含めると292頁にのぼる伝記である。著者は序言において、当人の死後35年たってから、このような伝記を書くには、内容の客観的眞正さということに充分気を使わねばならぬのは当然だが、自分に書けるものは、やはり「極めて個人的な、私自身(＝ショーレム)の生の様々な経験や決断によって規定されているベンヤミン像である」と断っている。確かにこの本に捉えられているベンヤミンは、21歳にしてそれまでの研究課題であった数学を放棄し、目標をはっきりと、前々から情熱をもって従事してきたユダヤ学に定めたショーレムの眼差によるベンヤミンであり、終始ユダヤ神秘主義思想の光の下で捉えられたベンヤミンであるという感は強い。また一般に、ベンヤミンはリガ出身の女性革命家、A. ラシスやプレヒトと識り合って、意識的にもマルクス主義の方向へと進み始めた後でも、初期のユダヤ神秘主義思想に根ざすものが、その中に残り続け、彼のマルクスズムを独自の謎めいたものにして、と言われている。そしてメシア的時間、メシアという表現も最後まで彼の著作の中に見られるものでもある。だがそのありようはショーレムの考えているらしいような純粋に宗教的な意味合いばかりではなさそうである。またショーレムの再三の熱心な勧めと奔走にもかかわらず、ベンヤミンがついにパレスチナ行きを決行しなかつたのも(「失敗した計画」(1928-1929)), ショーレムが考えていたように、ベンヤミンが彼の地でヘブライ語とユダヤ学を研究することに、ひとつの己れの可能性を見つても、ラシス等をめぐる「彼の個人的な諸関係のもつれ」や単なる優柔不断が、その決行に対しネガティブに働いたからではなく、ベンヤミンの内面において、それを背じようとはしないもっと積極的要因があったと思われる。

だが以上のようなことも含めた上で、われわれがここに見出すものは、著者の望みどおりひとつの生き生きとしたベンヤミンのプロフィールである。それはおそらく、本書の随処にうかがえる二人の、殊にショーレムのベンヤミンの精神の深さに対する感銘と共感に基づいた、そしてまたベンヤミンの側の、自己に近づいて来るあらゆる刺激に対して旺盛に開かれている精神のあり方に基づいた友情の大きさのなせるわざであろう。また実際にベンヤミンの精神が、様々な面をもち、いくつかの極の間を微妙に揺れ動きつつ変容していったということでもあろう。

ショーレムはここでベンヤミンの生を、彼等の交友関係とベンヤミンの生の外的・内的変化に応じて、「初めての出会い」(1915), 「深まる友情」(1916-1917), 「スイスで」(1918-1919), 「大戦が終って」(1920-1923), 「遠く離れての友情」(1924-1926), 「パリ」(1927), 「失敗した計画」(1928-1929), 「危機と転換」(1930-1932), 「亡命の日々」(1933-1940)と、時代順に9つに分けて述べている。

このうち二人の間に直接交友関係が存在したのは、1915年の出会いからショーレムが永住の地としてパレスチナに去る1923年秋までの8年間であり、その後は1927年パリでの半月の再会と1938年再びパリでの5日の再会があっただけである。従ってこれらの年月のことはすべて、互いに交換された手紙や文書に基づいてショーレムが想像したベンヤ

ミンが想像したベンヤ

ミンの像である。

そのせいか、前半については、ショーレムが実際に見聞きした、ベンヤミンについての具体的な、しかも細かい観察眼によるエピソードが多く盛り込まれており、現実生きて動いていたベンヤミンという人間の姿が、われわれの前に髣髴として来る楽しさがある。例えば他人に対して極めて礼儀正しく、かつ「自然な距離をおき、相手にも同じ態度を要求する様に見える」こと、物音に極度に敏感であったこと、また自分の周りに相手が「直感的にさとりねばならぬ沈黙の立ち入り禁止区域」をおきたがり、何でもないことを秘密にしておきたがる癖のあったこと、話し出すと神経を集中して整然といつまでも語ったが、人の話を聞くこともうまく、実在的確な質問をすること、スイスで共に生活し、「その思考の倫理的であるにもかかわらず、市民的な日常生活での反道徳的面」にショーレムが驚く話、チェスや推理小説や時折駆られる賭け事への情熱等、多様な顔のベンヤミンが目当りに浮び上って来る。

またこの頃の彼が、自分の所有している絵や田舎臭い手工芸品や人形等に対して非常な愛着をもっていたこと、訪問者にそれらを出して来て「手に取らせて、いわばピアニストが即興演奏をするように、それらについてあれこれ講釈するのが好きだった」ということ、ショーレムにはデカデンツに思えるほど蔵書に熱狂的愛情を抱いていた話なども印象的である。これらの逸話を、後に「複製技術時代における芸術作品」の中で、現代において芸術作品は、その一回性から発するアウラを失い、没落しつつある、だがそれに代って、あらゆる礼拝的価値を受けつけぬ複製技術による芸術、殊に映画が、大衆社会時代の芸術として現われて来るだろう、と述べたベンヤミンと比べてみても面白かり。さらには「エドゥアルト・フックス——収集家と歴史家」

において「それが生まれる生産過程から切り離される、とまでゆかぬにしても、それが生きながらえる生産過程から切り離されて考察される形成物のエッセンスとしての文化という概念は、史的唯物論にとって物神的性格を帯びている」と述べているベンヤミンと結びつけて考え合せてみるのも、その事物との係わり合い方の複雑さの点で面白い。

後半は、1924年夏カプリ島でラシスと知り合ったことがきっかけとなる、いわゆるベンヤミンの転換(=Wendung)と、彼をパレスチナへ呼び寄せようとするショーレムの試みを中心となる。この頃のベンヤミンの課題となっていた様々なことについても、ショーレムはかなりつつ込んだ解釈をしている。例えばシュールリアリスト達への彼の燃えるような興味の解明、またその興味と裏腹の関係にあるヴァレリーへの傾斜の説明、ハッシュェへの関心等である。だがカフカとの関係の説明を始め、総じて後半においては、カバラ的なものとベンヤミンを強いて結びつけようとする著者の意図が目立つ。読者の前に自由にベンヤミンのイメージを浮び上らせるという趣きの少ないのは、直接の接触のなかったことにもよるであろう。

パリ亡命中にベンヤミンと知り合ったハンナ・アーレントによる、彼にマルクシズムの側から最大の影響を与えたブレヒトとの交友を中心に書かれた伝記「ヴァルター・ベンヤミン」、またショーレムによれば、フランクフルト学派の中で唯一人「ベンヤミンの神学的面を認めた」アドルノーの「想い出」等と比較して読めば、面白いであろう。

(文中のベンヤミンの著作の引用は、晶文社版「ベンヤミン全集」による。)

Gershom Scholem: *Walter Benjamin — die Geschichte einer Freundschaft.* Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1975.